

相模原市南区下溝の福田家の来歴とその蔵などについて 付 下溝地区・福田家の蔵収蔵資料の整理について～市民協働による資料整理の試み～

小澤 葉菜*・加藤 隆志

* 相模原市立博物館資料整理員

はじめに

本報告では、今回の相模原市南区下溝の福田家蔵調査のうち、主に福田家や蔵の来歴について、現当主福田弘夫氏（昭和22年生）におうかがいした内容を中心に報告する。

福田家の来歴について

福田家が現在の場所を居住地としたのは、戦国時代の末頃のことである。北条氏照の娘が、山中大炊助との婚礼に際し、父氏照から化粧田として現在の上溝・下溝をもらい、新居を堀之内に構えた。この時その供として、氏照の家臣で、福田家の祖先である福田兵庫助忠光や、井上家の祖先井上図書某らも一緒に移り住んだといわれる。しかし、夫の大炊助も、大炊助との間に生まれた娘も早世してしまい、それを悲しんだ氏照の娘は近くの天応院へ出家し、貞心尼と名乗り、天応院の中興となった。

その後も、福田兵庫助忠光や井上図書某らは貞心尼に仕え務めを果たしていたが、天正16年（1588）に貞心尼が亡くなり、天正18年（1590）に北条氏が滅びると、この地で村民になったのだといわれる。現在、福田家にある仏壇二基のうち、一基は福田家のもので、もう一基は貞心尼関係のものだそうである。

それ以来、福田家は弘夫氏の祖父為一郎氏の父要助氏に至るまで、代々下溝村の名主を務めてきた。その傍ら酒造業もしていたようで、弘夫氏の子供の頃には裏の畑の中に酒蔵跡の穴があり、戦時中には防空壕として利用されていたようである。なお、使用されていた酒造道具は、明治時代に座間市の黒沼氏へ譲られた。麻溝村の初代村長であった要助氏は、明治17年（1884）にコレラにより若くして亡くなられたが、明治初期の大区小区制のもとにおいて副戸長を務めており、国会開設運動にも携わった人物だったという。また、その子来助氏（明治3年生）も村長をしており、高座郡の会議に出席していた記録も残っているようである。来助氏は、横浜市の瀬谷に本店があった瀬谷銀行の上溝支店長も務めており、来助氏の他にも、橋本支店長は相沢氏（『相沢日記』の筆者）、大野支店長は義澤氏（来助氏の妻の実家）といっ

たように、各村長などの経験者が支店長を務めていたようである。しかし来助氏には後継ぎがなかったため、その弟の為一郎氏（明治9年生）が福田家当主となる。為一郎氏は、東京農工大学（蚕糸学校）へ行っており、県の役人も務めた人物で、地域に養蚕の指導なども行っていた。

現在の福田家とその周辺について

福田家は屋号を「ナケー（エ）」という。弘夫氏いわくこれは旧名主の名称で、母利子氏の厚木の実家など、親戚でそう呼ばれる家があるそうである。現在は、福田家の周囲はほとんどが住宅地だが、以前一帯は福田家の裏庭続きのような状態で、下原のバス停近くの稲荷神社まで敷地だったという。この稲荷神社は、もともとは弘夫家を含め3軒の福田家を中心に祀っていたものだが、現在は新屋敷自治会の12の組が1年ずつ交代で祭を行っている。明治時代に地番が「稲荷林」になったが、かつては周囲が畑で、稲荷神社だけがぼつんと建っていたという。この稲荷神社から少し離れた場所に、福田家の屋敷墓があり、そこには福田兵庫助忠光の墓石とされるものもあり、それには元和4年（1618）11月11日に建てられたとの刻印がされている。

福田家のある新屋敷には、終戦頃には福田家を中心に、矢野家、清水家、小泉家、加藤家、座間家、黒沼家、斎藤家、青木家、篠崎家など20軒あるかないかで、稲荷神社から見渡すことができたそうである。現在は、約135～6軒となっており、地方からの移住者も多い。一方、堀之内、松原、大橋は、古くからの住人が多いという。今から20年前に八幡神社の社務所を建設するための資金集めを行った際にも、移住者の多い新屋敷では一律の金額を出資している家が多いのに対し、堀之内や松原、大橋、大下では、家の格に応じた金額が出資されていることから、そのことがうかがえる。

福田兵庫助忠光以前について

井上家は、貞心尼の再興した天応院の檀家であり、かつての下溝村の新屋敷以外の村民は、天応院か清水寺の

檀家だが、福田家は、相模川を渡った厚木市猿ヶ島の日蓮宗本立寺の檀家である。また、福田氏・井上氏とともに貞心尼と共に下溝に移り住んだといわれる矢野家がある。矢野家も福田家と同じ本立寺の檀家であるが、本立寺の総代を務めているのは、厚木の家が2軒（3年くらいずつで交替）と弘夫氏の福田家である。冠婚葬祭などを共同で行う家の付き合いもそれぞれ別であり、総代以外の寺の役回りは、弘夫氏以外の福田家と、矢野家で務めている。

福田家と日蓮宗との関係性及び、浜名氏については、弘夫氏による調査によれば次のようである。福田家の祖先福田兵庫助忠光は、『新編相模国風土記稿』によれば、浜名豊後守某の次男と書かれている。この人物と同一人物と考えられる北条氏政治家の浜名豊後守時成という人物が、現在は安産祈願の寺（おんめさま）として知られる、鎌倉の日蓮宗大巧寺に天正3年（1575）に土地（三浦郡森崎郷）を寄進したという文書が残されている。弘夫氏は、5～6年前に大巧寺の住職に話を聞きに行っているが、住職は浜名氏についての詳しいことは知らないという。浜名氏の出自を辿ると、源頼政の子孫で浜名湖周辺に居を構え、『吾妻鏡』に登場する浜名氏との関係性も考えられるそうだが、現段階では不明であり、『新編相模国風土記稿』の記述がどこまで正しいのか、明確にはできないのが現状である。

弘夫氏の幼少の頃の暮らしについて

5人姉兄のうち戦後生まれは弘夫氏だけである。弘夫氏の父武夫氏は、昭和の初め頃に慶応大学を卒業し、銀行に勤務していたが、昭和10年（1935）以前から、幾度となく各地に兵役に赴いては除隊を繰り返していたという。弘夫氏の幼少時代には、姥川や鳩川に沿って田圃が連なっており、ほとんどの家が農業を営んでいた。福田家も田圃を所有していたものの武夫氏が勤め人で本格的な農業は営んでいなかったため、農繁期に学校が休校になったり早く終わったりすると、弘夫氏は近所の友人の畑や田圃に遊びに行った。福田家の田圃は、戦後の農地解放の時に一部を残して人に譲り、残った一部の管理は誰かに委託していたそうである。また、戦後は主屋の裏にあった小屋で、鶏や豚を飼って出荷していたこともあった。戦前とは異なり、戦後を生活していくためには必要なことだったのである。日常における買い物は、上溝や八王子（特に衣類）、町田、厚木へ行っており、そこで間に合わない物は、東京のデパートへ行ったという。上溝へは映画も観に行っていたという。昭和10年生まれの弘夫氏の長姉知子氏によると、子供の頃に家族で外出する

際には、きちんと帽子を被って外出したとのことである。

蔵や主屋について

〈蔵について〉

弘夫氏の母利子氏（明治42年生）は、厚木市愛名の出身で、公立女子大学の前身校を卒業し、秦野の大秦野高校（現秦野総合高校）の前身であった女学校で教師をしていた。福田家へ嫁いだのは昭和9年（1934）で、平成13年（2001）に91歳で亡くなるまで、蔵内部や蔵の鍵の管理は、主に利子氏が行っていたようである。蔵の鍵は、書類などとともに、主屋の納戸に置かれていた筈筍の特定の引き出しにしまわれていた。弘夫氏の幼少の頃、日常生活で必要になったものは、利子氏が出し入れをしていたため、今回の調査において、初めて蔵の内部をしっかりと見たという。

弘夫氏によれば、蔵には、かさばるものや衣類、日常生活においてしだいに使用されなくなっていったもの、季節ごとに出し入れするもの（節供人形など）を収めていたのではないかとということである。所有者としては、弘夫氏の父武夫氏夫妻のものや、弘夫氏の兄姉や叔父、叔母が使用していたものが多く、弘夫氏のものなどもある程度の時期までは出し入れをしていたが、しだいにそのままになっていったようである。高価なものや、日常生活において大事なものは、蔵ではなく主屋へ置かれていたようである。蔵にも高価なものが収めてあったとしても、戦後の昭和20～30年頃に処分し、金銭と交換された。そういった買取人が、時々来ていた記憶が弘夫氏にはあるという。今回蔵から発見されたものの関係として、知子氏によると、福田家の鯉のぼり（昭和12年生まれの弘夫氏の兄のもの）は大きく立派だったためか、昭和16、17年頃に学校から先生や児童が見学に来たそうである（鯉のぼり自体は蔵からは発見されなかった）。

また、弘夫氏の幼少の頃、いたずらをした弘夫氏の兄が、



写真1 蔵を右後方より見る

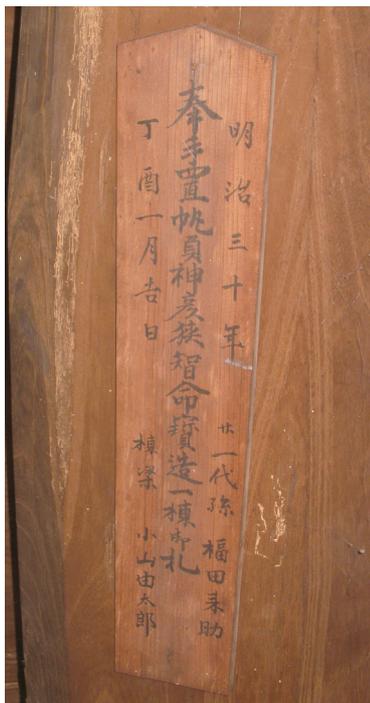


写真2 蔵の棟札

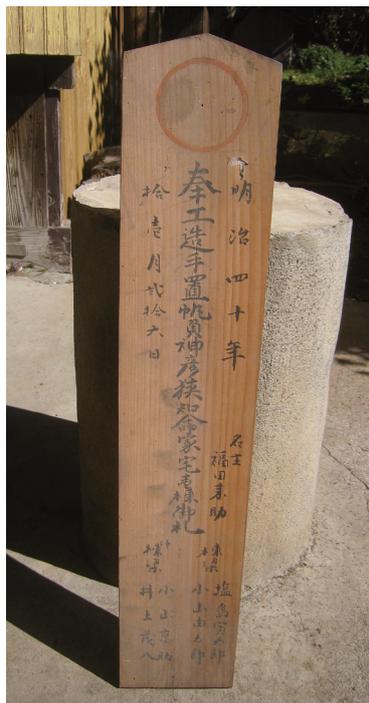


写真3 主屋の棟札(表)

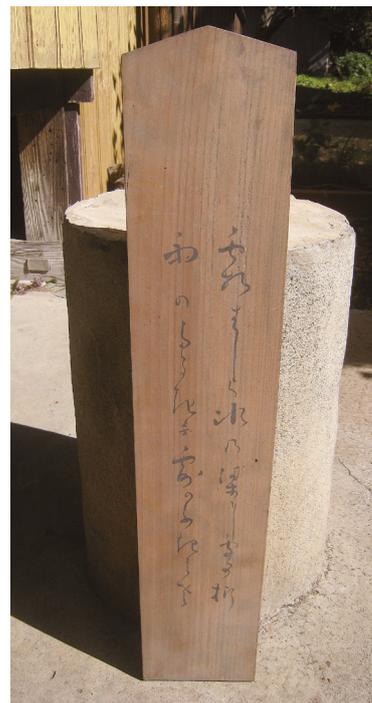


写真4 主屋の棟札(裏)

お仕置きで祖父の為一郎氏に蔵に閉じ込められたことがあったが、その時兄が砂糖をたくさん舐めたという話があり、この話から、蔵では砂糖や塩など保存の利く食料の貯蔵もされていたことがうかがえる。

蔵と主屋それぞれの棟札によると、蔵が建てられたのは、明治30年(1897)のことである(写真2)。同じく主屋が建てられたのが明治40年(1907)のことで、火災による再建だったようである(写真3)。なお、主屋建設については『普請諸経費帳』が残されており、総工費は1,055円であったと記録されている。来助氏は父親を早くに亡くし、明治の激動の時代において、20代で蔵を、30代で主屋を建てている。主屋の棟札の裏には、「霜はしら 氷乃深に 雪の桁 雨のたるきに 露のふきくさ」という、火難除けの意味が込められた短歌が書かれている(写真4)。

弘夫氏が10歳くらいの時に、蔵の入り口以外の三方を、近所の大工に金属のトタンで囲ってもらおうという修理があり、弘夫氏もそれを手伝った記憶がある。蔵は現在もトタンで覆われている(写真1)。他に修理などをした記憶や記録は残っていない。また、その頃は、入り口や2階の窓の開閉もできたが、現在はできなくなっている。蔵の棟札には、建て主として、弘夫氏の祖父の兄である来助氏の名前があり、「廿一代孫」と書かれているが、家系図をもとに考えてもそこまでの人数には上らないため、何をもってそう数えたのかは不明である。蛇足かも

しれないが、明治12年(1879)の下溝村『皇国地誌』には、「福田要助ハ兵庫之(ママ)助廿一世ノ孫タリ」[相模原市:p509]という記述があり、明治18年(1885)には、来助氏がこれを写していることが『神奈川縣皇國地誌殘稿』(p681)からわかるため、このことが何か関係しているのかもしれない。『皇国地誌』にはまた、貞心尼の供は浜名豊後守であり、貞心尼が亡くなった後、福田兵庫助と改名した、ともある。真偽はともかくとして、このような記述があることも示しておく。

〈主屋について(図1~3参照)〉

養蚕を営んでいた時期があるため、主屋には蚕室として使われていた部屋があった。昭和12年(1937)までは、他にも蚕室が3棟建っていたようである。その蚕室があったあたりには、現在は弘夫氏の建てた新しい主屋がある。また、道保川のほとりに水車があったが、これは、一度取った糸を巻き直すための動力としての水車(揚げ返し場)として使われていた可能性が考えられる。水車の管理は別の家に任せており、「車屋」と呼ばれていた。為一郎氏は県の役人を辞めた後、この近くに養蚕の乾燥工場を建てていたようである。

図1のちゃのみ・台所・食事室は、昭和20年代に改造されたが、以前はちゃのみ横の部屋にはへつついと囲炉裏があり、正月はそこで男性が料理をした。弘夫氏の祖父が為一郎氏も、正月には餅をたくさん食べ、95歳くら

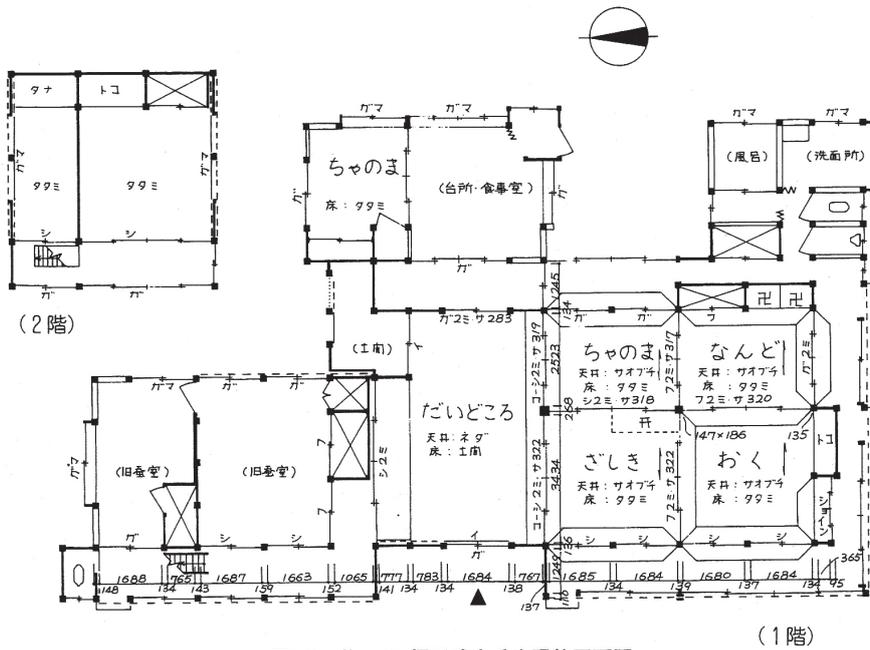


図181 No. 93 福田武夫氏宅現状平面図

図1 福田家主屋間取り図

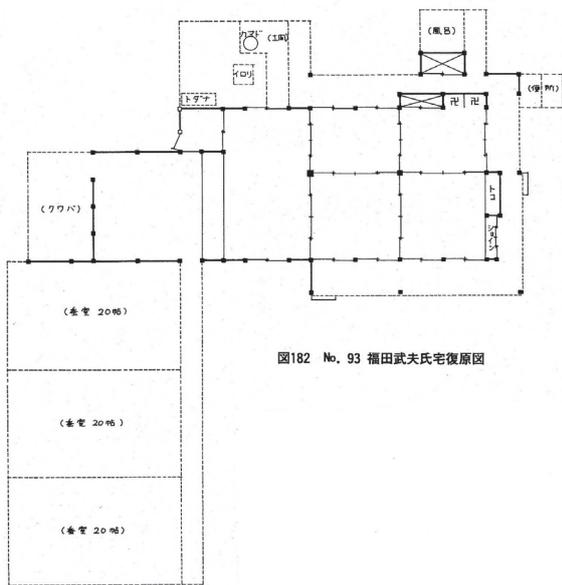


図182 No. 93 福田武夫氏宅復原図

図2 蚕室があった頃の主屋

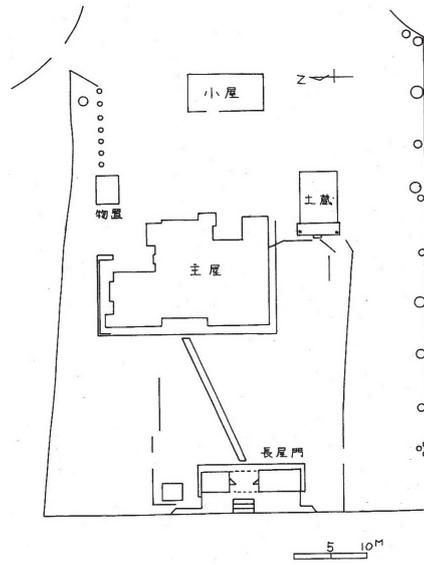


図183 No. 93 福田武夫氏宅配置図

図3 配置図

いまでは元気に畑仕事をしていたという。また正月には為一郎氏が、主屋をはじめ蔵の前や門など10か所くらいにお飾りをしていたそうである。

最後になるが、現在のキャンプ座間の周辺地域には陸軍病院など多くの施設があったため、終戦頃武夫氏の留守中に、主屋の2階建て部分にその関係者の軍医や看護婦がいたこともあったそうで、もしかしたらそういった

関係の資料もどこかにしまわれているかもしれないとのことである。

〈長屋門について〉

福田家には近世末頃に建てられた長屋門があり、これは「相模原市登録有形文化財」に指定されている。

〈古文書について〉

昭和30年代に相模原市が調査し、まとめたものとして、福田家からは天和2年(1616)など近世から明治頃の古文書580点が相模原市立博物館に寄託されている。更に平成14年(2002)の調査で211点、今回の蔵調査で314点、近世から明治頃の古文書が発見され、今後整理の上寄託される予定である。

【参考】

蘆田伊人編・校訂「新編相模国風土記稿 第三巻」『大日本地誌大系21』所収 雄山閣 1998

神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会編『神奈川県皇國地誌残稿(下巻)』神奈川県立図書館 1964

北島藤次郎『北条氏照とその周辺』鉄生堂書店 1991

相模原市『相模原市史 第6巻』神奈川県相模原市 1968

相模原市民家調査会編『相模原の民家』相模原市教育委員会 1986

※ この他、福田弘夫氏提供資料など。

【図の出典】

相模原市民家調査会編『相模原の民家』相模原市教育委員会 1986 pp178-179

※ 写真は執筆者による(平成24年10月24日撮影)。

付記(加藤隆志)

相模原市南区下溝の新屋敷集落に在住の福田家は、天保12年(1841)成立の『新編相模国風土記稿』の下溝村の項に「旧家重郎兵衛」として小田原北条家の氏照の家臣として記されている旧家である。福田家からは、すでに本館に近世～大正期の古文書類580点(書冊331点・書状249点)が寄託されているが、今年度に追加の資料寄託のお申し出があった。そして、こうした歴史資料だけではなく、民俗・生活資料についてもこちらは寄贈のお話があり、作業を進めることとなった。

ところで、本館では、毎月奇数週の水曜日に津久井郷土資料室(合併前は「津久井郡郷土資料館」)に保管されてきた資料を整理することを目的に通称「水曜会」が活動している。津久井郷土資料室は、城山ダム(津久井湖)の建設に伴う地域の民具類の収集と保存を行うことを契機として、昭和46年(1971)に津久井郡郷土資料館として津久井町(当時)中野に開館した。相模湖町奥畑在住の鈴木重光氏が収集した膨大な資料の寄贈を受けて保管していることで知られており、その内容は水没した地区を中心に収集された農具や漁具、生活用具などの民俗資

料をはじめ、江戸時代からの古文書、明治以降の記録類や教科書、津久井地域を中心とした絵はがき、雑誌及び書籍、当時の新聞のスクラップ、チラシ・パンフレット、新聞、包装紙、手紙などというように実に多岐に渡り、さらに年代や場所も地元のものだけに限らず広い範囲に及んでいる。

津久井郷土資料室に保管されてきた資料は、これまでも津久井地域で刊行された各町の町史の執筆の際に利用されており、また、その膨大な資料のうち、古文書や一部の絵はがき、雑誌・図書、教科書などについては整理が行われてきたものの、例えばパンフレットやチラシなど大量なこともあり、その全体像を把握するには到底至っていない。そこで、これらの資料の整理作業を平成23年(2011)から始めたのが水曜会の活動である。本館には各分野の講座等から派生した市民の会とは別に、元々は館の全般的な教育普及活動の補助等(最近では常設展示室のクイズラリーなど、主体的に企画から関わるものもある)を行うことから始まった市民学芸員の組織があり、当初はこの市民学芸員に登録されている方に声を掛けて開始したものである。作業的にはダンボールに納められている資料を箱ごとに取り出し、内容を確認しながら目録を作るといったオーソドックスなもので、膨大な資料点数を前に作業終了の見込みはたっておらず、今後も長い期間続けていくことになる。言うまでもなく、博物館が収集している資料は収蔵庫等に保管され、さまざまな面において活用されているが、一般には展示室以外にこうした膨大な資料が収蔵され、資料の性格に応じた基礎的な整理作業が行われていることがあまり理解されていないと考えられるような状況において、実際に市民が資料整理に携わる中から、今後の資料収集や整理保管の必要性や重要性を捉えることを目的として開始したものである。

また、資料の整理作業だけに留まらず、平成23年11月から翌年2月にかけて、収蔵品展「津久井郷土資料室所蔵資料紹介～市民の力で博物館資料へ～」を実施した。津久井地域をはじめとした歴史や生活が窺える重要な資料が合併した地域の資料室に残されており、こうした資料の整理を市民が主体となって実施していることを一般来館者にも示すことと並んで、資料整理は博物館の根本をなす大事な作業ではあるが一見すると地味で市民が継続的に行っていくには、何らかの動機付けにつながる仕掛けが必要ではないかと考えたものであり、博物館での整理作業はそれに留まるのではなく展示等へもつながるといった点を実感を持って捉えることを狙いとした。

この水曜会の展示は今年度(24年度)も行っており、

前回は展示が初めての試みであった関係もあり、展示の企画や資料の選択・解説パネル等の作成は加藤が担当して水曜会のメンバーは列品・撤収作業を中心に行ったが、二回目の今回は企画から撤収までの一連の作業の多くを水曜会が担った。水曜会では今後も資料整理及び目録化と年に一回の展示を続けていく予定である。

そして、今回の福田家の民俗・生活資料の整理に際してもやはり資料整理の市民の会（通称「福の会」）を結成してすでに作業を開始している。水曜会で対象としている津久井郷土資料室が保管するものは基本的には紙を中心とした資料であるのに対し、民俗担当として有形の民俗・生活資料の収集や整理保管等の作業を市民協働で行っていくことを検討していたところに今回の福田家からのお申し出があり、これを契機に会を結成したものである。24年12月現在、会には14名の方が加入し、10月（2日間）に蔵内部のモノの配置調査及び受け入れ予定資料の

選定、11月（1日）に福田家から館への資料搬入、11～12月（4日間）に館での資料洗浄、計測等の作業に着手し、年明けの1月からは毎月奇数週の木曜日を活動日として進めていくことになっている。また、水曜会と同様に、今回の資料や作業について紹介する展示も25年度には実施する予定であり、その作業も並行して進めていくことになる。本館では今後ともさまざまな試みを市民協働として行っていくことを目指しており、このような積み重ねがどのような成果を生み、あるいは課題が見えてくるかについては改めて検討しなければならないが、福田家の資料整理はまだ始まったばかりであるため、具体的な資料内容等の紹介などは別稿を用意することとし、今回は加藤とともに作業に当たっていくことになる小澤葉菜が、今後、福田家の資料整理を進めていくに際して予備的な調査として行った聞き書き等の内容を取りまとめたものを掲載した。



福田家・蔵前景



向かって右側から見た蔵



蔵内部の状況



蔵内部の状況



蔵内部の状況



調査 (10月18・24日) ①



調査②



調査③



資料運び出し (11月13日)



資料洗浄 (11月29日・12月6・13・20日) ①



資料洗浄②



資料洗浄③



くん蒸をまつ資料